

《寄稿》

抜き差しならない、僕とポーランド

霜田千代磨

2015年7月19日より30日迄、世界伝統空手道連盟のプレジデントのボーデック・クウェチンスキ氏と息子のヴィテックと、クラコフ大学を中心に二千名に空手道の指導をしている師範、パウエルの三名が来日、前半5日間同伴した。今回、来日の目的は伝統空手道の師範西山先生(米国、ロスアンジェルス在)が亡くなられた後、日本人の師範が不在だった為「心・技・体」のそろった人格者を彼等に紹介する為であった。

本年「全日本空手道連合会」(日本最大の空手道組織)に小生の大学空手道部先輩で空手道のプロ野上修一氏が六代目会長に就任された。吾々一行は、九州うきは市



吉井町の道場を表敬訪問した。又、福岡より、6月ポーランドのスタラア・ヴェシで行はれた世界大会でお目にかかっている、神野勝師範(日本空手道協会)も同道された。

その後、7月23日より25日迄、北海道に滞在、2000年以来15年ぶりに吾が家を訪問された。札幌では弟英磨が大倉山ジャンプ台を案内してくれた。

1972年、冬季オリンピックでポーランドのフォルトナ選手が111メートルの記録で金メダルをとった年である。この年の9月に小生がポーランド・ウッチ市へ留学した年でもあった。それがポーランド伝統空手道発足の原点でもある。二、三年前にポーランド伝統空手道「40周年記念誌」の表紙見開きに、微笑して型を演武している40年前の我身が居た。これこそ正に腐れ縁と呼ぶべきものであろう。

2016年10月クラコフ市で世界伝統空手道連盟の世界大会が準備されており「武道会議」も計画されています。心して英語、ポーランド語を勉強しなければと考えています。(しもだ・ちよまる)

写真：博多祇園山笠にて(左から)神野師範、パウエル、筆者、ヴィテック、ボーデック、英磨

『ポーランド語辞典』の頃の思い出 (1)

小原 雅俊



イヴァシュキェヴィッチの短編集を出そうではないか、と木村彰一先生(1915-1986)が言われたのは、週に一度白水社に詰めて日本で最初のポ和辞典『白水社 ポーランド語辞典』の編纂が終わりに近づいていた頃だったろうか。その日の作業を終えて、これも恒例になっていた飲み屋へと向かう途中でなかったことだけは確かだ。神保町界隈を白水社に向かって歩いていたのをよく覚えているからだ。「君、最近は一日一冊、アガサ・クリスティーを原書で読んでいるんだがね、愉快ですな、クリスティーは」——そう言ったのも、今にもぶつかりそうに行き交うグリーンネ・アレーの通行人の間を縫ってのそんな散策の時のことだった。あの時一緒に木村先生の言葉に頷いていたのは誰だったろうか。多分、木村先生の教え子に相応しく、今なおよく飲

み、よく食べ、旺盛な研究に意欲を燃やしている(とは言え、スラヴの小言語の研究者に割かれた日本の大学のパイはあまりにも小さい)当時の若きTだったろうか。木村先生が東大を定年退官し、早稲田大学に移ったあとの教え子のひとりだから、あれはもっと後の出来事だったろうか。

木村先生から学んだこと

—学問と、赤提灯から豪華ホテルのバーまで—

私にとっての木村先生は大学の恩師と言うわけではない。『白水社 ポーランド語辞典』に監修者としての名こそ挙げられていないが、古典文献学を修め、あの木村謹治の息子としてドイツ語に通曉し、博友社の『ロシア語辞典』の中心的編者でもあった木村先生を抜きにこの辞書はあり得なかった。六



年間の作業、とりわけ最後の三年間の週に一度の午後を白水社の一室で続けた共同

作業は、いわば辞書編纂学とは何かの演習のようなものであった。門前の小僧よろしく実地で学んだというだけではない。ワルシャワ大学のポロニスティカ(ポーランド文献学部)で時代ごとのポーランド語学史とポーランド文学史を毎年の辛い口頭試問に苦しみながら学んできた私には帰国した当初、少なからず自惚れがあったとすれば、それが徹底的に打ち砕かれたのも木村先生の学問的造詣の深さの前にてであった。歴大な印欧語に関する体系的知識をもとに説明されるスラヴ語の、そしてポーランド語の音韻規則の説明は、一介の語学生の体験的思い込みを悉く打ち破ったのである。私はポーランド語について根本から勉強し直さなければならなかった。遂にスラヴ学の何たるかを修めることは出来なかったが、帰国以来、二十五年間、相も変わらず間違いを繰り返しながらも、休むことなくポーランド語を教えて来れたのは、ひとえに木村先生との出会いのおかげだと思っている。

木村先生が、ライフワークとなるはずであったラテン語辞典の編纂に本格的に取りかかったばかりのところ、仕事場にしていた日本学士会館の一室で突然他界されたのは、つい昨日のことのような気がするというのに、もう随分昔のことになる。およそテディ・ベアとは言いがたいがっしりした体躯の持ち主に相応しく、片時もニトログリセリンを離さなかったというのに、である。葬儀で自宅に伺ったとき、私はドイツ語・ドイツ文学関連の歴大な本で埋まった書架の中に、なぜか無意識のうちにアガサ・クリスティーを探していたものだった。



人の死はその人との関係を記憶の領域に閉じ込める。自然の法則を免れることが出来ないのは分かっている。だが、アイン

シュタインならずとも、その才能に恵まれた人の頭脳に刻み込まれた歴大な知識と人格に一瞬にして関わる事が出来なくなるとは何と残酷なことだろう。木村先生はお茶の水や神山界隈の飲み屋やホテルのバー、昔の大隈会館のレストランや周辺のおでん屋、深夜、タクシーを駆った迷路のような狭く、入り組んだ世田谷区の路地が、スラヴ学者に相応

写真(上): 千野先生と木村先生(右)(神山孝夫氏提供)

写真(中・下): 我が家の近辺の野鳥たち by 小原

しいその豪放な飲みっぷり、“味覚”を知らぬ健啖さとともに鮮やかに記憶に蘇ってくるが、もはやあのいかにも人間味溢れる表情で私の問いに答えてくれることはない。最後の仕事となった日本で初めての本格的な教科書『古代教会スラヴ語入門』やヘンリク・シェンキエヴィチの『クオ・ワディス』のポーランド語からの全訳に見られる学問的緻密さと豊かな文学的素養をもはや直に学び取る術はない。

七十年代の日本では、すでに東欧の国々との文化交流がかなり盛んになっていたし、経済関係も発展しつつあったとは言え、ロシア語以外で本格的なスラヴ語辞典の出版を企画するというのはおそらく常軌を逸した行動であったに違いない。まさかその二十年後に「東欧革命」が成功し、その「余波」で国立大学にチェコ語科とポーランド語科が誕生することになろうとは想像だにできなかった。折りに触れて、遠い未来の日本における更なるスラヴ学の発展への熱い思いが幾度となく私たちの口にのぼせられてきたのは確かであれ、北大、東大と、日本の主だった大学にロシア語科を次々と創設してきた、あの木村先生にさえも予想出来なかったに違いない。



もっとも『白水社 ポーランド語辞典』も当初は単語帳に毛が生えたようなものを考えていたものようであった。それが編纂の作業を続けるうちに、用例こそ少ないが、ほぼ完璧な文法記述を備えた、優に二万語を超える語彙数を誇る「小辞典」と変身を遂げたのであった。最初から編纂メンバーに加わっていたとはいえ、辞典の企画の段階は私にはつまびらかでない。おそらく、後のポーランドと日本の文化交流の“フィクサー”を自任していた吉上昭三氏(1928-1996)と私たちの辞書のもうひとりの隠れた共編者(なぜなら私たちの歴大な、とてもきれいとは言えない原稿をすべて清書して、印刷所に渡せる状態にしたのは他ならぬ彼なのだから)であった白水社の伊吹基文氏の“陰謀”であったに違いない(そして伊吹氏もまたかつて、木村先生に心酔したスラヴ学の学徒だったし、木村先生らとともに赤提灯から豪華ホテルのバーでの酒席までとことんスラヴ学者の誉れを守ったひとりだ)。

吉上・内田夫妻の無私のポーランド愛

まだ留学中に出した一冊の翻訳書を目に留めて、全くの畑違いであった私を“発見”してくれたのは、吉上昭三・内田莉沙子(1928-1997)夫妻であった。一面識もなかった二人から舞い込んできた突然の手紙がなかったなら、その手紙の後を追うよう



にポーランドに姿を現した二人が帰国した後の「おい、辞書を作るぞ。帰って来い」の一言がなかったなら、さて、三十過ぎまで、学年末試験の恐怖に怯えながら、しかしその一方で、生まれて初めて知った学問の面白さに、憑かれたように学んだポーランド・スラヴ文献学を、とにもかくにも日本で役立てることが出来ただろうか。

しかもこれは決して私のケースが特別なわけではない。さまざまな分野の優秀な若手研究者を“発見”し、ポーランドの魅力の虜にさせ、今日の日本のポーランド学の担い手を数多く育成した吉上昭三氏にはまさに“フィクサー”の名が相応しいかもしれない。もしポーランドと日本の今日の付き合いが、他人行儀でない、相互の深い人間的信頼を基礎にしたものになっているとしたら、日本学研究者だけでなく、すべてのポーランドの友人への吉上昭三氏の変わることない愛情と二つの遠い国々の人々の時空を超えたユートピアへのロマンチストの夢のおかげであろう。その突然の悲劇的な死は、「ポーランド文化の現在・過去・未来」と銘打った個人雑誌『ポロニカ』(年刊)の発行(「十巻は出さなくちゃ」と言っていたが、第五号が最終号になってしまった)も、新しい時代のポーランドと日本の交流の基盤にしようとしたポーランド財団の夢も志半ばで断ち切ってしまった。

ポーランドを知らなくとも、子供の頃、内田莉莎子さんが翻訳・紹介したポーランドの児童文学や絵本を一度も手に取ったことがない日本人はいないに違いない——あの病弱な体のどこにあれほどのエネルギーが秘められていたのだろうか。戦後のポーランドの絵本のほとんどを、誰もその右に出る者がいない、あの天性の内田魯庵譲りの見事な日本語で紹介し続けた莉莎子さんも、吉上昭三氏の死の一年後、後を追うように他界した。「いやあ、僕も疲れたよ」——突然の悲劇の数日前の、いつもの長電話の中での述懐。人生のすべてを託していた夫の思いも寄らぬ葬儀の日の、入院中のベッドから抜け出してきた莉莎子さんの気丈な表情。

もう吉上夫妻のように謙虚に、しかし無私の情熱でポーランドを愛することは誰にも出来ないかも知れない。その情熱に惹き付けられた無数の人々がいた。後にチェコ語の専門家であるにも拘わらず、チェコ語科よりもポーランド語科に優位を与える形で、当時の学長だったロシア文学の碩学原卓也氏(1930-2004)とともに東京外国語大学への両学科設置を実現することになる千野栄一先生(1932-2002)もそのひとりだろうか。(つづく)

(こはら・まさとし、1940年福島県生まれ。執筆当時(1999年6月)、東京外国語大学ポーランド語専攻教授。本稿はワルシャワ大学刊の JAPONICA 12/2000 に Henryk Lipszyc, Romuald Huszcza 両氏によるポーランド語訳が掲載された。)

写真：吉上・内田ご夫妻(栗原朋友子さん提供)

ポーランド & ニッポン歳時記

身の隠し場所 近所の家では二階を増築しています。辺りは埃と騒音でいっぱい。さらにお隣さんもリフォームの最中です。実際、ポーランドの夏休みと言えば、旅行カリフォルムの季節です。隠れ場所がありません。

| | |
|-----------------------|----------------------|
| zmęczeniu słońcem | 陽に疲れ |
| skrawka zieleni szuka | 緑を探す |
| mała dżdżownica | ミミズかな ポズナン市、津田モニカ |
| burza minęła | 嵐過ぎ |
| nad leśną dróżką stoi | 森の小道に |
| brzozowa brama | 樺の門 |

ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ

夏の雷女房逃げれば猫までも
(雷—三夏)

むらさきの花何のはな芋の花
(芋の花—仲夏)

ラベンダー果ててピエロの悲しけり
(ラベンダー—初夏)

岩見沢市、霜田千代磨

『ポーランド語辞典』の頃の思い出 (2)

小原 雅俊



『白水社 ポーランド語辞典』のもうひとりの隠れた共編者が、実は千野先生だった。白水社の編纂室に詰めた三年間、仕事が片付く頃には必ず顔を出した。そのあとに、毎週、恒例のスラヴ学者たることを証す饗宴が続いたことは言うまでもない。この饗宴には当時のスラヴ学を担った錚々たるメンバーがことあるごとに集まってきたものだった。

飲めば飲むほどに文字通り鼻息は荒くなるが、決して乱れることのない森安達也氏(1941-1994)もそのひとりだった。貴公子然とした風貌と穏やかで端正な佇まいは、私などとは違った、まさにエリートに相応しいものだったが、この世界では数少ない同世代の人間に属していたこともあったろうか、私たちは互いに親近感を抱いていたように思う。その学問的伝統を熟知した緻密な知識と大胆な発想が生み出した仕事はスラヴ学研究の新たな領域の誕生を予告するものであった。だが、この若い才能をも病魔が奪い去ってからも随分になる。

もうひとり、私にとって忘れられない存在に米川和夫氏(1929-1982)がいる。私がワルシャワに着いたとき、米川和夫氏は帰国直前だった。帰国してからも滅多に顔を合わせることはなかったが、絶えず気になっていたのは、私にはどれほど努力しても身につけることができないであろう翻訳の味と、そして何よりもポーランドの大学でポーランド文献学を学んだ者に見られる関心の共通性だった。今も

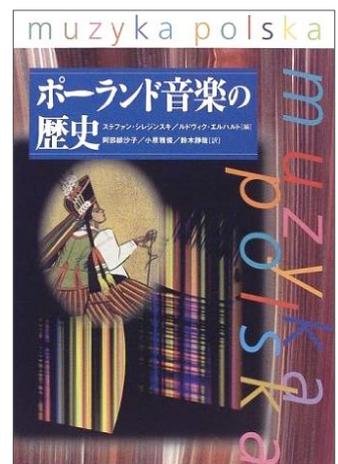


キエフにおける国際スラヴィスト会議(1983年9月)にて(左より)森安達也、千野栄一、米川哲夫(和夫氏長兄)、灰谷慶三(本会第三代会長)の各氏(筆者撮影)

私は、イヴァシュキェヴィッチやナウコフスカ、ポロフスキやルジェヴィッチの文学への関心は、木村先生と米川さんのあとを継いで、と言ったら失礼に当たらるだろうか、持ち続けている。

米川さんもその後、まもなく病魔に冒されて世を去ってしまった。不思議な縁だと思うのは、米川さんが生前、ずっと教鞭を執っておられた早稲田大学の語学教育研究所のポーランド語の授業が突然私に回ってきたことだった。以来、今の大学の多忙さがゆえに若いロシア・ポーランド文学研究者に代わってもらうまで、確か十三年間、未亡人のナナさんとともに、外部からの熱心な受講生も受け入れながら、ポーランド語を教える場を守ってきたものだった。

最近、シレジンスキ、エルハルト他著の『ポーランド音楽の歴史』(音楽之友社、1998)という本を二十年掛けて出版したが、これもまた、もし、あのようになかったら、本来、米川さんが完成させるはずのものであった。とまれこうして、米川さんへの負債のひとつはどうか片を付けることができたことを喜んでいる。



私がここに書きつけた物語は、この四半世紀の間に起こったことだ。どれをとってみても私には、つい昨日のことのようだ。たかが二十五年、だがこの僅かな時間を埋めた、ポーランドに関わり、ポーランドを愛した人々の夢の何と濃密だったことか。今は亡き人々と、ともに語らい、仕事に励んだ日々の何と歓喜に満ちていたことだろうか。(1999年6月)

*こはら・まさとし 1940年福島県生まれ。執筆当時、東京外国語大学ポーランド語専攻教授。本稿はワルシャワ大学刊の JAPONICA 12/2000 に Henryk Lipszyc, Romuald Huszcza 両氏によるポーランド語訳が掲載された。